

【目的】 今日、我々の住生活において、起居様式の洋風化（いす座）が速いスピードで進行している。しかし欧米にみられる起居様式とは少し異なり、床上でのいす座である。その結果、和室の使用が減少する傾向にある。これらの理由により各家族周期段階における和室の所有数、和室の利用率、和室に対する考え方などを調査し、今後の和室の動向について検討する。

【方法】 家族のライフステージを若い方から順に5段階（ステージ）に分類し、全ステージにわたりアンケート調査した。調査対象は広島県内の家庭で、90世帯から回答を得た。各ステージの調査数にアンバランスを生じないように配慮した。

【結果】 1) 住居の所有形態については、ステージが高くなるほど持家一戸建が多くなり、ステージ5では約8割が持家一戸建である。また延べ床面積および室数についてもステージが高いほど多くなっている。2) 和室を全く持たない家庭はなく、和室の所有数はいずれのステージにおいても2～3室が多く、全室に対する和室数は5割程度である。床の間については、ステージが高いほど所有率が高くなっている。3) 個室以外の和室の使用目的としては、客間としての使用例が最も多い。その他の使用目的、使用主体、使用時間などについては、家族形態や居住形態との関わりがありステージごとに異なった特徴がみられる。ステージ2では子どもの「遊び場」や「家族寝室」として使用する世帯が多く、全ステージのうち最もよく和室を利用している。ステージ5では「趣味の場」としてよく使用している。4) 和室に対する印象としては「落ちつきがある」「親しみが持てる」「暖かい」等のイメージを各ステージに共通して感じている。